

様々な観測研究の理念は結構だが、現実のオペレーション、観測手法を考えると、特に南極での観測は多くの困難がある。これまで1点観測では、やり得る多くのことをやってきた。今後、新しい成果を得るには、観測手法としての新しい切り口 (break through) が必要であると共に、その実現にはこれまでの日本隊の体制を変えた新しい型が必要であろうと、和田 (極地研) より問題提起された。真の国際的共同観測、航空機による南極支援、南極域での航空機の高度利用等々。さらに、無人観測航空機ペルセウスが南極・北極を通じて新しい可能性の一つであろう。

引き続き多くの意見が出された。技術的ネックがあるからできないと言ってはダメで、それを突破する若い力が求められていること。また、気象学会の中だけで議論を close することなく、枠を広げて議論する必要があること。女性の南極越冬、航空機の導入、開かれた南極、が求められていること。いい計画ができないと体制を変える原動力たり得ないという議論が多いが、実際、体制が変わらないといい計画が出ないという関係もある。即ち、体制を変えることを、計画を考えることと並行して同時に行なわなければならないこと等が議論された。

モデル研究者からは、「広域のデータを求めているが、その所在が不明だ」との意見が出た。これまでどんな観測が行なわれ、どういうデータが集まっているか、研究情報の収集、データ所在情報の収集といった仕事が必要である。また、観測計画を実施した際は、広く利用し得るデータセットを作り上げるなど、もう少し組織的な作業が求められている。今後は、実質的

研究代表者 (PI: Principal Investigator) を明確にし、観測計画立案の時から主体的に観測終了後のデータの処理、解析、アーカイブまで含めた一貫した仕事をまとめるべきであろう。ともすれば現今のプロジェクトは、観測が終わるや、即、次の観測計画を始めねばならず、データをまとめ、成果をじっくり吟味する余裕のない自転車操業が現実で、プロジェクトの間をもっと開け休業期間をもつべきだ (正論です) という発言もあった。

今後、これ等提案をどう具体化するか、現実のステップが課題である。将来計画を検討するワーキンググループを極域研究連絡会の中に作ること。次回気象学会にて、極域研究のこれまでの成果や問題点をふまえ、新しいテーマが抽出されるような特別セッションを設けること、を決めた。会員諸氏の積極的参加を期待する。さらに将来の極域研究の方向性、本連絡会のあり方にご意見のある方は、事務局あるいは幹事宛連絡いただけるとありがたい。なお、本連絡会の事務局は、神沢博 (極地研→環境研) に変わって、新しく立候補いただいた阿部彩子 (東大気候システム研究センター) に引き継がれた。

参考文献

- 遠藤辰雄, 1988: 月例会「南極圏の気象」(第8回)の報告(極域研究の近未来), 5. 将来の研究に関する自由討論, 天気, 35, 265-266.
 神沢 博, 安成哲三, 1992: 極域研究連絡会1992年春季研究会「南極域の物質循環」報告, 天気, 39, 775-778.

1994年度研究助成応募

日本生命財団

研究助成の概要

- ・標記の趣旨に沿った研究 (自然科学・社会科学・人文科学を問いません。)
- ・応募者の所属や資格を問いません。
- ・助成期間: 平成6年10月から1年間
- ・助成金総額: 合計1億円程度
- ・選考方法: 当財団にて選考

応募方法

- ・「応募要項」「申請書」は、下記あて270円切手同封の上、ご請求下さい。
 - ・「申請書」の提出期限: 5月20日(金)消印。
- 〒541 大阪市中央区今橋3-1-7
 日生今橋ビル
 日本生命財団研究助成部P係
 TEL: 06 (204) 4012